



## 一人一人を見る

富山県中学校長会会長

会長 白江 日呂雄

国語教師として50年にわたり教壇に立ち続け、研究者としても広く知られた大村はま先生の著作に『教えるということ』がある。内容は、1970年の夏に新規採用教員研修会の講師として来県された際の講演である。その中で、「子ども一人一人を見る」ことについて触れておられる。

「要領のいい言い方で『中ぐらいの生徒を本当に授業を進めればよい』とどこかで聞いたことはありませんか？誰のことでしょうか、中ぐらいの生徒とは。そんなことは、教えたことのない人の、子ども一人一人を見つめて話をしない人の空論です。」「一斉授業であっても、一人一人を見ているということです。個人にしたり、集団にしたり、小グループにしたりいろいろ方法があるけれども、つまりは個人を伸ばすことが中心であると思います。」

私が若い頃勤務した学校は、いずれも所謂荒れた学校で、日常の生活指導や問題行動への対応が私みたいな若造であってもしっかり求められた。授業でも何でもきちんとさせようと思うから、どうしても生徒のできていないところや不十分な部分に目が行き、注意や叱責ばかりしていた記憶がある。大村先生の「一人一人を見つめて伸ばす」は全然できていなかったというか、その必要性をあまり感じていなかった。

ある日、妻と保育園の息子の3人で小学校の運動会に出場する娘の応援に行った。娘は運動が大の苦手で、徒競走は昨年も最下位だった。今回は、少しでも速くなるため授業でしっかり練習していると言っていた。徒競走が始まり、案の定スタートから遅れた娘は、前を走る一人に追いついたがわずかに届かずゴールした。コースの横で見ていた私たちは、やっぱりビリ

だの走り方が悪いだの文句ばかり言っていたが、ゴール近くで応援していた息子はそれこそ飛んできて、「お姉ちゃんかっこよかったねー」「僕も走りたくなったわー」と真顔で走るまねをした。私と妻は思わず顔を見合わせてしまった。そして走り終えた娘が駆け寄ってきて、「惜しかったー、でもいい走りだったでしょ」と言い、息子の「かっこよかったよ」の言葉に「まあね」と両手を腰に当て胸を張る姿は、まるで1等賞にでもなったかのように一瞬輝いて見えた。息子はそれを見ると、「走ってくる」「トーツ」と叫びながらまた飛んでいくし、娘は満面の笑顔で「次は応援頑張らなくちゃ」と言って団席へ戻っていくし、娘と他の子をたっぷり比較し順位を気にしていた私たちは、キラキラした目で姉だけを見ていた息子に教えられ助けられた。あっぱれである。当時は、中学校の相談室担当として勤務校や校区の小学校の保護者や教職員に「一人一人の良さに目を向けてほしい」と熱弁していたものだから、恥ずかしいとしか言いようがなかった。

今、子供たちを取り巻く環境は、少子高齢化やグローバル化が一層進むとともにAIやビッグデータ、IoT、ロボティクス等の先端技術が進展・普及するSociety5.0時代を迎えている。学校においても、GIGAスクール構想が加速度的に実現し、学習端末を利用した遠隔地の学校や地域（海外）との授業や交流、データサイエンスやAI講座等、今までできなかった学習活動が可能となっている。従来とは違う形の学びは今後も増えていくかもしれないが、教師は、いつの時代でも「一人一人を見つめて、良さや可能性を見つけ、伸ばす」姿勢を崩してはいけないと自戒を込めて強く思うのである。